

パスカル『パンセ』注解

— L212, 213 —

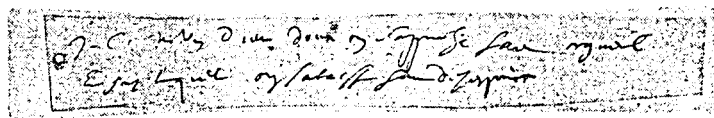
支 倉 崇 晴

はじめに

ブレーズ・パスカルの未完の遺著『パンセ』の注解としては、国内では1981年度日本学士院賞の対象になりⁱ⁾、世界的にも最良の注解としての評価が確立ⁱⁱ⁾している故前田陽一によるものがあるⁱⁱⁱ⁾。ただ、残念なことに、前田の逝去によって注解は中断し、それを継続することが日本のパスカル研究者に課された大きな課題の一つとなっている。本稿は、前田が未着手であった断章のうちの二つに対し注解を試みたものである^{iv)}。記述の体裁は、略号等も含めて、すべて前田陽一著『パスカル「パンセ」注解』全3巻、岩波書店、1980、1985、1988年）によっているし、使用した『パンセ』の版も、同書の場合と同じである^{v)}。

L212 (原467、B528)

原 文

L212¹⁾

(原467の上から3番目)

J. C. est Vn dieu dont on s'approche sans orgueil

Et sous lequel on s'abaisse sans desespoir.^{a)2)}

a) ? + ir

J.-C. est un Dieu dont on s'approche sans orgueil et sous lequel on s'abaisse sans désespoir.²⁾

訳 文

イエス・キリストは、高慢になることなく近づける神、絶望することなくその下にへりくだれる神である²⁾。

注 解

(1) テキストについて

一つ (L893, B573) を除いて、すべて第16章「他宗教のまちがい」の章に属する断章8個が収められている原467の上部に位置し、上から3番目に貼ってある細い横長のほぼ長方形の紙片に、この断章の文章だけが、パスカルの筆跡で2行で記されている。

トゥルノール2冊本では本断章は194番となっているが、次の次の断章である196番の断章(原455に貼られている L214, B491) のところに巻末の「肉筆原稿集との対照表」では、次のような注がつけられている。

「先立つ2断章を含めた三つの断章のテキストは、同じ頁に次々に続けて書かれた後、ハサミで分けられた。」

ここでいう「先立つ2断章」とはトゥルノール2冊本における194番と195番のことで、前者は本断章 (L212, B528)、後者は本稿後半の L213, B551である。

トゥルノール1冊本においても、これらの3断章は、トゥルノール2冊本の場合と同じ順序で次々に247頁に記載されているが、2冊本では196番に相当する3番目のテキストの末尾に、2冊本の注より詳しい次のような注がつけられている。

「これら三つのテキストは、同じ一枚の紙に次々に続けて書かれた。パスカルは、これら3テキストを別々に分けて糸を通して綴じるためにハサミで切り離した。

はじめの二つのテキストは肉筆原稿集の467頁に貼られた。3番目のテキストは455頁に見出される。」

セリエ版においても、この3テキストは同じ順序で245番から247番までの3断章として並べられている。ところでセリエ版の新版であるボルダス書店刊行のクラシック・ガルニエ叢書所収の『パンセ』(初版1991年)の246番(本稿後半に掲げる L213, B551)の注には、1976年刊行の旧版である SEL にはなかった次の注がポール・エルンストの研究の成果に基づいてつけ加えられている。

「245、246、247の断章は、同じ紙に次々に続けて記された。糸を通して綴じる三つの穴が証明するように、これら3断章は、パスカル自身によって切り分けられた(P. エススト)。」

この注が言及している「糸を通して綴じる穴」については、トゥルノール1冊本の上記の注においてもその存在がほのめかされているが、肉筆原稿集をそのファクシミリ版のコピーで見ても、本断章を含む3断章が書かれた紙片のそれぞれの左端の部分に、その穴の影がはっきりと写っていることが見て取れる。これらの穴は、他の多くの紙片に見られるものと同様、分類のために、紐を通して紙片を束ねた跡である。

デコット版では、パスカル自筆と通常思われている断章を自筆でないとしたり、逆に通常自筆でないとして断章を自筆としたりというように、他の版との見解の相違がよく見られるが、本断章にもアステリスキのしるしをつけ、肉筆原稿集のこの断章の筆跡はパスカル自身のものではないとしている。筆者の見解は、パスカル自筆としているミショー、両ブランシュヴィック、両トゥルノールと同じである。

アヴェ初版は、本断章はポール＝ロワヤル版には入っていないとしているが、ミショー版が注において、「ポール＝ロワヤル版には入っていなかったが、のちに第14章に挿入された」と記している。ブランシュヴィックは、1冊本の巻末の「対照表」Table de concordanceでは、ポール＝ロワヤル版には入っていないことにしているが、3冊本の注と「対照表」では「のちに14章の7番として入った」としている。「のちに」というのはラフェマ3冊本の注に明記されているように1678年のことで、この年に刊行されたポール＝ロワヤル版の増補版において、本断章は第14章「イエス・キリスト」の章に7番という番号をつけて初めて掲げられた。

(2)「イエス・キリストは、高慢になることなく近づける神、絶望することなくその下にへりくだれる神である。(J.C. est Vn dieu dont on s'approche sans orgueil Et sous lequel on s'abaisse sans desespoir.)」

イ) 原 稿

この本文は、全部一気に書き下ろされている。

最後の語「desespoir (絶望)」の末尾の「ir」の部分のみ、一度書いたあとをなぞった、あるいは書き直した跡を残していて、トゥルノール1冊本も、この2字をイタリック体で示して、訂正をほどこされた箇所としている。この訂正が、語尾の「ir」をはっきりさせるための単なる書きなぞりか、あるいは語尾を別の綴りにするための書き直しかは不明である。後者だとすれば、はじめ「desesperer」と動詞の不定形で書いたが、対となっている前置詞「sans」に続くもう一つの語が「orgueil (高慢)」と名詞のため、それに合わせて名詞「desespoir」にすべく語尾の「erer」を「oir」に書き直したという可能性が考えられる。パスカルは、きちんと対になった表現が好きであり、また得意であった。

肉筆原稿を見ると、2行目の第2語「sous (下に)」の下の紙片をハサミで切り離した部分に横線が見える。「(1) テキストについて」の項で取り上げたトゥルノール2冊本、1冊本、セリエ

版新版の注記に従えば、この線は、本稿後半の L213 の肉筆原稿の紙片左側最上部に見える横線の続きである。こうした横線は、同じ紙に記された他の断章として扱う文章と区別するために引かれたもので、ここでは L213 の断章とハサミで切り離す際に、横線も切り離された二つの紙片のそれぞれに二分されて残ったものである。

ロ) テキストの伝承

第 1、第 2 両写本、ポール＝ロワヤル版の増補版（1678 年）以降、諸版はこの部分を正しく伝えている。テキストの異同も、句読点の有無、相違、「イエス・キリスト」の表記の相違に限られていて、次の通りである。

1. 冒頭の「J.C. (イエス・キリスト)」を肉筆原稿通りに表記しているのは、第 1、第 2 両写本、モリニエ、トゥルノール 1 冊本、ラフェマ 3 冊本の五つの版だけである。ラフェマの 1958 年版、全集版の両版では、「J.-C.」とハイフンが入っている。他のすべての版では、「JESUS-CHRIST」か「Jésus-Christ」（前者はポール＝ロワヤル、ボッシュ、両アヴェ、ルアーンドル、ミショーの六つの版）のように、すべての字を表記している。なお、アスティエ版では、断章として扱える段落の前でこの版が通常しているように、ダッシュをつけて「——Jésus-Christ ...」と始めている。
2. 「sans orgueil（高慢になることなく）」のあとに肉筆原稿では句読点は見当たらないが、その通りにしているのは、第 1^{vi)}、第 2 両写本、モリニエ、トゥルノール 1 冊本、ラフェマの 3 冊本、1958 年版、全集版、そしてル・ゲルンの八つの版だけである。ストロウスキー版はここにピリオッドを打っている。他の版はすべて、この箇所にコンマを打っている。
3. 「sans orgueil（高慢になることなく）」のあとにピリオッドを打ったストロウスキー版は、当然ながら次の「et」を「Et」と大文字で始め、さらにここで改行を施している。

ハ) 内 容

まずアヴェ初版が、対句になっている「高慢になることなく (sans orgueil)」と「絶望することなく (sans desespoir)」とに、それぞれ説明の注をつけている。前者には、「ストア派の人々が神に近づくのだと主張していたようにではなく」、後者には、「人間の無力を主張する懐疑論者、あるいは運命論者のようにではなく」というのがその注である。

次に、注に特徴のあるジローの初版と改版とが、この断章に対して次のような感想を記している。

「あらゆる賛辞を汲みつくし、あらゆる注釈が及ばない表現がパスカルには数多くあるが、（——再読するごとに新しいそのような表現が見つかるが、——）また一つそれがここにある。ここには、内容においても形式においても、充実と力、深さと輝きがあり、その傍らではすべてが色あせて見える。長大な説教よりも雄弁で明解なこの 2 行の中に、キリスト教がその全きかたちで存在している。パスカルは、〈宗教の奥底について話す〉ことを自慢できた。パスカルは、誰よりも強くまた親密に、その思考と心情のすべてをあげて、キリスト教のこの奥

底〉に迫り、この〈奥底〉を感じとっていた。」(かっこ内の部分は、ジロー改版でつけ加えられた。)

ジロー版の注によく見られるパスカルの『パンセ』礼賛のことばの一つであるが、「長大な説教よりも雄弁で明解なこの2行の中に、キリスト教がその全きかたちで存在している」というのは、本断章の本質をよくとらえた評言といえよう。

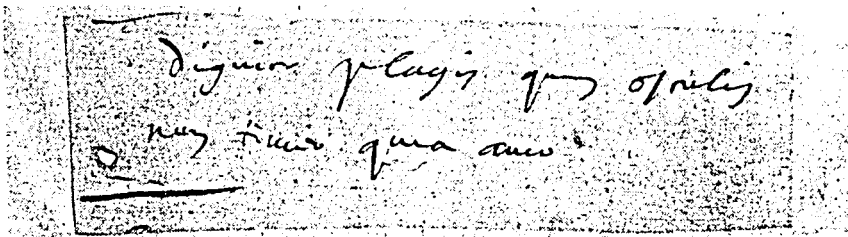
なお、パスカルが「宗教の奥底について話す」と記しているのは、L862、B883の断章においてである。

最後に、トゥルノール2冊本が、『『キリストにならいて』のⅢの5参照』と注記し、トゥルノール2冊本の改訂版であるアンジュー版がそのままこの注を受け継いでいる。トゥルノールやアンジューが、『キリストにならいて』のどの版を参照させようとしているのかは不明である。また、注の「Ⅲの5」の「Ⅲ」や「5」が、巻、部、章、章内の小区分のいずれに相当しているのかも不明である。さらに、『キリストにならいて』の内容は、オランダ語版とラテン語版とで章その他の順序や配列を異にしている。前者の英訳に依った由木康訳(角川文庫、1956年)と、後者に依った大沢章、呉茂一訳(岩波文庫、1960年)によって、「Ⅲの5」に相当する可能性のあるすべての項目を当ててみたが、本断章との関連は見出せなかった。

L213 (原467, B551) ¹⁾

原文

L213 ¹⁾



(原467の上から2番目)

dignior plagis quam osculis

non timeo quia amo ²⁾

Dignior plagis quam osculis non timeo quia amo²⁾

訳 文

口づけされるよりも打たれるのに値しているのですが、私は恐れてはいません。なぜなら、私は愛しているからです²⁾。

注 解

(1) テキストについて

一つ (L893, B573) を除いて、すべて第16章「他宗教のまちがい」の章に属する断章8個が収められている原467の上部に位置し、上から2番目に貼ってある横長の長方形に近い紙片に、この断章の文章だけが、パスカルの筆跡で、ラテン語によって2行で記されている。従って、この断章の紙片は、前断章 L212のすぐ上に貼られていることになる。

本稿前半で扱った前断章 L212の「(1) テキストについて」の項で紹介した、トゥルノール2冊本、1冊本、セリエ版新版の注を総合すれば、本断章の肉筆原稿は、L212や、後続の L214とともに同じ一枚の紙に次々に続けて書かれてから、ハサミで L212、L214と切り分けられて、原467の上部に L212と並べて貼られた。

トゥルノール1冊本の注がその存在をほのめかし、セリエ版新版の注が言及している「糸を通して綴じる穴」の跡は、本断章の紙片の左端の下方にはっきりと見えている。

本断章を初めて発表したのはミショー版である。

(2) 「口づけされるよりも打たれるのに値しているのですが、私は恐れてはいません。なぜなら、私は愛しているからです。(dignior plagis quam osculis non timeo quia amo.)」

イ) 原 稿

この本文は、全部一気に書き下ろされている。後記の「ハ) 内容」の項で扱う典拠のことを考慮すれば、「全部一気に書き移されている」とする方が正確かもしれない。書き直し、書き加えも一切見られない。

本断章が書かれている肉筆原稿の紙片を見ると、左端の上部と下部に多少右上りの二本の横線が引かれているのがはっきりと見える。これらの横線は、同じ紙に記された他の断章として扱う文章と区別するために引かれたものである。

左上部の横線は、紙をハサミで切り分ける際に途中で切断されたが、右側に伸びた残りの部分

である続きの線は、本稿前半の L212 の「(2) イ) 原稿」の項で記したように、L212 が書かれている紙片の左すみに見られる。

左下部の太い横線の上部と下部には、それぞれ短い別の横線の痕跡が見える。「糸を通して綴じる穴」と太い横線との間にある上部の途中で切れた線が何を意味するかは不明である。いったんこの線を引いたがきちんとした通常の横線にならなかったのも、またすぐ下に太く長い横線を引いたというのかもしれない。この太い横線の下に見える多少湾曲した感じの短い横線は、肉筆原稿の大文字「L」の最上部と思われる。ハサミで切り分けたあと原455に貼られた L214 の紙片の最上部に書かれたあとすぐ横線で消された「La plus」という 2 語の冒頭の「L」の字の最上部は、紙片切り分けの際わずかながら切断されてしまっている^{vii)}。「(1) テキストについて」の項で記したトゥルノール 2 冊本、1 冊本、セリエ版新版の三つの版の注記のことを考慮すれば、切断された「L」の字の最上部は、L213 が書かれている紙片の左下すみに見える可能性がある。この多少湾曲した感じの短い横線は、まさにその「L」の字の最上部に見える。パスカルが書いた大文字の「L」の字の最上部は、このように多少とも湾曲しているのが通例である。

ロ) テキストの伝承

第 1、第 2 両写本はこの部分を正しく伝えているが、この部分を初めて発表したミショー版は、2 行目 2 語目の「timeo (私は恐れている)」を「time」と語尾「o」を落してしまっている。肉筆原稿では、「o」と読むべき字がはっきりと記されている。他方、ストロウスキー版は、1 行目末尾の「osculis (口づけ)」を、「oculis」と 2 字目の「s」をうっかり落して記している。肉筆原稿では、「s」の字がはっきりと書かれている。

以上 2 点を除けば、諸版はこの部分を正しく伝えている。テキストの異同も、語頭の大文字小文字の使い分け、句読点の有無や相違、テキストの配置や行揃え、ラテン語引用文の表記法に限られていて、列挙すると次の通りである。

1. 冒頭の語「dignior (…よりも…に値している)」を肉筆原稿通りに小文字で始めているのは、肉筆原稿に忠実であることを宗とするトゥルノール 1 冊本のみで、他の諸版はすべて文頭ということで大文字で始めている。
2. 2 語目の「plagis (打たれること)」のあとに、ミショー版のみが肉筆原稿には見当らないコンマを打っている。
3. 1 行目最後の「osculis (口づけ)」のあとに、肉筆原稿では句読点は見当たらないが、ミショー、両シュヴァリエ、ストロウスキー、トゥルノール 2 冊本、アンジュー、スタインマンの七つの版はコンマ、ル・ゲルン版はピリオッドを打っている。
4. 2 行目冒頭の「non (…ではありません)」を第 1 写本だけが大きく書き始めている。先立つ「osculis (口づけ)」のあとにピリオッドを打っていたル・ゲルン版も、「non」は小文字で始めている。肉筆原稿では、明らかに小文字で書き始められている。

5. 2行目2語目の「timeo (私は恐れている)」のあとに、ミショー、ストロウスキー、ドディユー、トゥルノール2冊本、アンジュー、スタインマンの六つの版はコンマを打っている。肉筆原稿では、末尾の「o」と読むべき字は、本断章最後の語「amo (私は愛している)」の末尾の「o」とくらべると、異なる書き方がされているので、ここにコンマが打たれていると見ることも可能である。肉筆原稿に忠実なトゥルノール1冊本は、コンマが打たれているとは見なしていない。

6. 本断章最後の語「amo (私は愛している)」を第2写本だけが大きくて書き始めている。肉筆原稿では小文字で書き始められている。

7. 「amo (私は愛している)」のあとの断章末尾には、肉筆原稿ではピリオッドは見当たらないが、肉気津原稿に忠実なトゥルノール1冊本も、この版の通例通り、断章末尾ということでピリオッドを打っている。第1、第2両写本を含めて他の諸版はすべてピリオッドを打っている。

8. 肉筆原稿では、「osculis (口づけ)」までを1行目、「non (…てはいません)」以降を2行目として、2行に分けて書かれているが、その通りの配置にしているのは、第1、第2両写本、トゥルノール1冊本、ラフュマの1951年版、1958年版と全集版、アンジュー、スタインマン、セリエ、ル・ゲルンの十の版である。他の諸版では、すべて改行せず追い込みで続けて表記している。

ところで、肉筆原稿では、1行目冒頭の「dignior (…よりも…に値している)」と2行目冒頭の「non」とを行の並び方、揃い方の見地からくらべると、「non」の方が最初の「n」の字の分だけ突出している。パスカルの肉筆原稿は、行の頭を揃えることや、改行の際冒頭の語を引っ込めて書くことにはほとんど意を用いていないのが通常であるが、「non」の冒頭の一字が突出していることを敢て重視するならば、追い込みで表記する方がむしろ適当と言えるのかもしれない。

上記十の版のうちアンジューとル・ゲルンの二つの版では、二行に分けて書かれてはいるが、1行目冒頭の「Dignior」よりは、2行目冒頭の「non」の方が2字分ほど突出しているので、一見したところ肉筆原稿通りに見える。しかしながら、両版とも、本断章の文の冒頭と末尾に引用文であることを示す「《」と「》」のギユメ記号をつけていて、この「《」記号をも含めると2行の冒頭部は一致し、肉筆原稿のように2行目が突出することにはならなくなる。

他方、セリエ版は、旧版では2行の頭を揃える配置にしているが、その新版になると、何故か2行目の頭を1行目の頭にくらべて二、三字分下げて1行目の方が突出した体裁に変えている。セリエ版が新、旧版ともに依拠している第2写本では、2行の頭は揃っていると言ってよい。

9. 本断章は全文ラテン語であり、また次項「ハ) 内容」で見るように全文が抜き書きした引用文と見なせるが、肉筆原稿では、ラテン語や引用文であることを示す書き方はされておらず、フランス語や引用文でない一般の文の場合と変らぬ表記がされている。諸版では、ラテン語や引用文であることを示すために版によってさまざまな書き方がされている。第1写本とトゥルノール1冊本の二つの版だけが、肉筆原稿同様に、他の一般の断章と異なる書き方をしていない。第2

写本では、全文に下線が施されている。ミショーとアンジューの二つの版では、全文が「【】」記号と「】」記号で囲まれている。岡ブランシュヴィック、岡ジロー、岡シュヴァリエ、ストロウスキー、ドディユー、ラフユマの五つすべての版(1947年、1951年、1952年、1958年、全集)、スタインマン、デコット、セリエの計16の版では全文をイタリック体になっている。トゥルノール2冊本では、全文が「【】」記号と「】」記号で囲まれている。ル・ゲルンとカプランの二つの版では、全文をイタリック体にした上で「【】」記号と「】」記号で囲んでいる。

ハ) 内 容

B1冊本がこのラテン語によるテキストの典拠と思われるものを最初に示している。その注では、まずラテン語テキストのフランス語訳として「*Méritant des coups plutôt que des baisers, je ne crains pas parce que j'aime.*」という文章を掲げ、そのあとに「聖ベルナルドゥスからの引用(同書、第2巻、1186頁)。」と注記している。このフランス語訳文が誰の仏訳書から取られたのかは不明である。ブランシュヴィック自身による仏訳かもしれない。「同書」としているのは、B1冊本では551番に相当するこの断章が見出されるB1冊本573頁の前の頁である572頁に断章B549(L191)が掲げられているが、その断章の終わりに出てくるラテン語文の典拠として、B1冊本は、「聖ベルナルドゥス『雅歌についての説教』第84説教。ミーニュ版第2巻1184頁からの引用」と注記していたからである。従って、本断章に対する注記の意味は、「聖ベルナルドゥス『雅歌についての説教』第84説教。ミーニュ版第2巻1186頁からの引用」ということになる。ミーニュ版『ラテン教父著作集』では、ベルナルドゥスの著作は第182巻から第185巻までの4巻に収められているので、第2巻は第183巻に相当する。この巻の1186段⁽¹⁾には、次の文が見出される(下線 支倉)。

[... digna latebris quaeris lucem, et curris ad sponsum, dignior plagis, quam osculis? Mirum si non pro sponso iudicem offendas. Felix, qui ad haec animam suam respondentem audierit: Non timeo, quia amo; quod non amata omnino non facerem. Itaque etiam amor. Nihil dilectae timendum. Paveant quae non amant ... (…隠れ場にいるのに値するのに光を求め、口づけされるよりも打たれるのに値しているのに、花婿のところに駆けつけるのですか？花婿ではなく裁く人を怒らせなければ不思議です。これに対して、幸いなるかな、自分の靈魂がこう答えるのを聞く者は、私は恐れてはいません。なぜなら、私は愛しているからです。もし私が愛されなかったとしますと、そのようには決してしないことでしょう。) このように私も愛されることもあるのです。愛される者は何も恐るべきではないのです。愛さない者は恐れているのがよいのです…)] (J.-P. Migne, *Patrologiae Latinae*, t.183. Edition originale, 1854. Réimpression anastatique par Brepols, 1995.)

このように、途中は省略されているが、本断章通りの文章が存在しているので、パスカルは、このベルナルドゥスの文章の必要部分を抜き出して引用したと考えられる。

このB1冊本の注は、シュヴァリエ両版、トゥルノール2冊本、ラフユマの1951年、1952年、全集の三つの版、アンジュー、スタインマン、デコット、セリエ、ル・ゲルン、カプランの12の版に受け継がれている。

まず、シュヴァリエ2冊本では、典拠が第84説教中の第6段落であることまでが示されていて、単にB1冊本の注を受け継いだだけではなく、実際に第84説教に当って確認したことを裏付けている。この版は、原文と小活字による解説を並記していて、一部の短い断章は下の欄外の注で示されている。本断章は、解説において、まず、「Digne plutôt de ses coups que de ses baisers, pourtant je ne crains pas, parce que j'aime.」というフランス語の文章で現われる。そして、下の欄外の注においてラテン語の文章が、B1冊本より詳しい典拠も含めて示されている。解説文中のフランス語訳はシュヴァリエ自身によるものであろう。ところでこの仏訳には、ラテン語原文の直訳では現れない所有形容詞の「ses」が、「coups」と「baisers」という対比されている名詞のそれぞれにつけられている。直訳だけだと「coups」や「baisers」の主体が自分なのか他者なのかははっきりしないので、コンテクストの意を汲んでつけたものかと思われる。

トゥルノール2冊本の注は、「Plus digne de coups que de baisers, je ne crains pas, parce que j'aime.」というブランシュヴィック1冊本とは多少異なるフランス語訳（仏訳者これも不明^{ix)}）を掲げたあと、「この金言を、パスカルは、聖ベルナルドゥスから吹き込まれたようである」と述べている。

ラフユマ1951年版と全集版は、B1冊本と同じフランス語訳を掲げてB1冊本の注の内容を示したあと、「この典拠は、1947年バリの Bonne Compagnie 社から刊行された『パンセ』の版によって与えられた」としている。この『パンセ』の版は、ブランシュヴィックの弟子である Geneviève Lewis が、ブランシュヴィック版を元にして序文や注をつけて刊行したもので、本断章にもB1冊本とほぼ同じ注がつけられている。ラフユマが、1897年の刊行以来今日に至るまでもっとも広く流布した『パンセ』の版であるB1冊本によってではなく、パスカル研究者も含めてほとんど読者を得ることがなかった版によって、本断章の典拠を知ったというのは奇妙なことである。戦中戦後の混乱期の然らしめたことであろうか。そのラフユマも、1952年版では、トゥルノール2冊本と同じフランス語訳の方を示したあと典拠を示しているが、その典拠を知ったのがどの書物によるものかまでは記していない。

シュヴァリエ1冊本の注では、フランス語訳の文章が載せられているが、シュヴァリエ2冊本の仏訳でつけられていた所有形容詞の「ses」は省かれた訳文になっていて、ラテン語原文に近い仏訳に戻っている。

トゥルノール2冊本の改訂版の性格を持ち、注もトゥルノール2冊本のをそのまま受け継いでいることが多いアンジュー版は、ここでもトゥルノール2冊本と同じフランス語訳を掲げたあと、トゥルノール2冊本では「…聖ベルナルドゥスから吹き込まれたようである」として断言は避け

ていたところを、「…聖ベルナルドゥスから吹き込まれた」と断言に改めている。アンジューにこの注の手直しをさせた理由は不明であるが、トゥルノール2冊本以降の版の中で、ラフュマの1951、1952年の二つの版や、シュヴァリエ1冊本が、B1冊本に由来するベルナルドゥス典拠説を採用し続けていることに鼓舞された可能性が高い。トゥルノール2冊本の注では聖ベルナルドゥスの名が挙げられているだけで、詳しい典拠は示されていないかったが、アンジューの注では、「『雅歌についての説教』第84説教。ミーニュ版第2巻1186頁」と明記して、段を頁と取り違える誤りまで含めて^{x)}、B1冊本の注に由来する典拠を再録している。断言するに至ったからには、注がこのように詳しくなるのも当然のことであろう。

スタインマン版の注もB1冊本のフランス語訳を掲げているが、「plutôt」という1語だけ「plus」という別の語に変えている。

ブランシュヴィック版に新注をつけた版であるデコット版も、本断章ではB1冊本のフランス語訳と、聖ベルナルドゥスの名、書名、説教の番号を注にしている。

セリエ、ル・ゲルン、カプランの三つの版では、注でトゥルノール2冊本のフランス語訳を示すと同時に、出典が聖ベルナルドゥスの『雅歌についての説教』第84説教であるとしている。このうちセリエ版だけは、トゥルノール2冊本のフランス語訳では「je ne crains pas」となっていたところを、「je suis sans crainte」とことばを変えている。また、セリエ版だけは、他の二つの版が第84説教の第6段落であることまで示しているのに対し、段落にまでは言及していない。

B1冊本が掲げた典拠は、このように後の諸版に受け継がれ、その文章中に全く同じ字句が存在することからも出典として疑い得ないものとなった感があるが、そのブランシュヴィックは、3冊本においては、この典拠には触れず、本断章冒頭の「dignior plagis (…よりも打たれるのに値している)」に次の注をつけている。

「パスカルが断章531番で翻訳している聖ルカのテキストから借りた表現：自分の主人の意志を知らないが打たれるのに値すること (digna plagis) をした従僕は少しだけ打たれるであろう (12章48節)。聖アウグスティヌスの次のテキストの記憶もまたあるのではないか。くもしあなたが愛さないなら、滅びることを恐れなさい…」『聖なる処女性について』第38章^{xi)}。ジャンセニウス著『アウグスティヌス』、「救い主キリストの恩寵について」、第5巻、第22章中に引用。」

B531はL538に相当し、その冒頭には「自分の主人の意志を知っている者はいっそう多く打たれるであろう」という文がたしかにフランス語で記されている。このフランス語の文は、注に引用されている『ルカ福音書』12章48節よりは1節前の47節の内容に近く、従って、ウルガータ訳ラテン語でこの注に引用されている48節のテキストのフランス語訳ではない。つまり、直訳ではないにせよ、「パスカルが断章531番で翻訳している」と言い得るルカのテキストは、48節よりもむしろ47節なのであるから、この注の冒頭の記述は不正確である。しかし、本断章の「dignior

plagis」という2語が、48節のラテン語テキストには「digna plagis」という形で現れていることはブランシュヴィックが指摘した通りである。従って、本断章のラテン語を筆記する際、ルカのラテン語テキスト中に現われる同じ2語のことも連想されていた可能性は否定できない。トゥルノール2冊本とアンジュー版の注はB3冊本のこの注を受け継ぎ、前記のように、「聖ベルナルドゥスから吹き込まれた（ようである）」と記したあとで、両版共に「digna plagis という表現が、従僕に関する聖ルカの第12章47節に見出される」と記している。B3冊本の注では48節であったのを47節にしているのは、B3冊本注の不正確さを改めようとしたからであろう。B531、L538^(a) 冒頭のフランス語による聖書テキストの典拠を示す点ではこの訂正は正しいし、47節が従僕に関する節であることはたしかである。しかし、それらは本断章の注としては必要のないことである。本断章と重要な関わりがある「digna plagis」という表現が47節に見出されるというのは誤りで、ウルガータ訳ラテン語聖書で「digna plagis」の2語が記されているのは48節である。48節中のこの2語の存在にもかかわらず、本断章の直接の典拠となると、他の6語の存在からも、聖ベルナルドゥスの『雅歌についての説教』と言わざるを得ず、トゥルノール2冊本とアンジュー版以外の諸版は、ウルガータ訳『ルカ福音書』第12章中にこの2語が存在することには言及していない。

B3冊本の注の後半に紹介された聖アウグスティヌスの文が本断章筆記の折にパスカルの念頭を去来したことも、大いにあり得たことと思われる。本断章後半の「non timeo quia amo（私は恐れてはいません。なぜなら、私は愛しているからです）」の対極にあるのが聖アウグスティヌスの文であり、救いや恩寵の問題との関わりにおける「愛」と「恐れ」はパスカルの念頭を離れなかった問題であったはずだからである。なお、ジャンセニウス著『アウグスティヌス』の初版（1640年）で確認したところ、「救い主キリストの恩寵について」は第3部の標題であり、その第5巻は「キリストの恩寵の効果」と題されている。第22章の前後の第13章から第27章にかけては「恐れ」の問題が扱われていて、第22章の最後のパラグラフ（同書232頁）に、聖アウグスティヌスの『聖なる処女性について』第38章からの上記注の引用文を見出すことができる。アウグスティヌスの著作を愛読したパスカルが、『聖なる処女性について』まで直接読んでいたという確証はないが^(a)、ジャンセニウスの『アウグスティヌス』を何度も読み返す際に、この箇所であウグスティヌスからの引用文に触れたことは疑うことはできない。

なお、トゥルノール2冊本は、注記の末尾に「Cf. plus loin, p.281, n.4」と記している。この版の注では、p. は page, n. は note を意味している（例えばこの版の第2巻215頁の例参照）。とすると、「281頁注4番に後記すること参照」ということになるが、この注が何を意味するかは不明で、何かのまちがいだと思われる。トゥルノール2冊本の1冊目は206頁で終わっており、2冊目には281頁が存在するが、注は2番までで、4番は存在せず、2番までの注も本断章とは無関係だからである。この版の注が他の断章を参照させる場合は、例えばこの版の第2巻7頁にあるように、「n°346, p.80（80頁の第346番断章）」のように記しているが、「p.281」の「p.」が「n°」のまちがい

の可能性もあるかと思ひ断章281番（L348, B718に相当）を参照してみたが、注4番は存在するものの本断章とは無関係である。すでに見て来たように、本断章の注においてもアンジュー版はトゥルノール2冊本の注に多くを負っているが、この末尾の部分に関しては、アンジューもそのまま受け継ぐことはせず削除している。

注

- i) その審査報告としては、杉捷夫「パスカル『パンセ』注解第一」（『前田陽一 その人その文』、『前田陽一 その人その文』編集刊行委員会編、1989所収）がある。
- ii) SEDES 書店刊行の Jean MESNARD, *Les Pensées de Pascal* は、1976年の初版以降、一貫して Appendices III に《L'interprétation des variantes des *Pensées* par la méthode de double lecture de M. Yoichi MAEDA》と題する小論を掲げ、前田の注解を「パンセ」最良の注釈としている。1993年刊行の同書第2版では、この小論は次の文で始まっている。“Le meilleur commentaire des *Pensées* a été rédigé en langue japonaise. Il est l'œuvre du regretté Yoichi Maeda ...” (p. 384)
- iii) 前田の注解には、本文で後記する岩波書店刊全3巻のほかに、その前身となった月刊雑誌「心」に1965年6月号より1981年8月終刊号まで163回連載されたものがある。注解の対象となった断章は、岩波書店刊全3巻においてはL1からL76の途中まで、雑誌「心」ではL1からL131の途中までである。前田の注解は、活字になる前に、東京大学、その定年退職後は慶応義塾大学のそれぞれ大学院において、文献批判学演習という形で教室において行われたがそこではL1から始まってL200あたりまでが対象となった。
- iv) 筆者が既に行った同様の試みは以下に掲載されている。「パスカル『パンセ』注解（1）—（10）—L203～211—」東京大学教養学部「外国語研究紀要」36～43巻、各2号、1988～1995。東京大学大学院総合文化研究科・教養学部「外国語研究紀要」1～2号、1996～1997。
- v) 詳しくは、同書、特に第二巻「緒言」及び第三巻「校訂者あとがき」、さらには各巻末の「参考文献」参照。
- vi) 第1写本は、マイクロフィルムを焼付けた写真版で見る限りでは、「orgueil（高慢）」という語の末尾は左右の頁を合わせた影の部分に隠れてしまっていて、コンマがあるかどうかは判別できない。旧 Bibliothèque Nationale である Bibliothèque Nationale de France の site Richelieuに残っている Manuscrits 部に保存されている第1写本を実際に閲覧したところ、コンマはないことが確認できた。写真版ではあまりはっきり見えないが、第1写本自体を見ると、行末の大抵の語は、最後の字が書かれたあと長く右に伸びた線となっている。句読点を行末の語につける際は、最後の字が横線として伸びて行く前につけられるが、ここではそこにコンマ等は見当たらない。
- vii) 次の機会に執筆予定のL214の注解に掲げる肉筆原稿コピー参照。
- viii) 先立つB549の注も含めて、B1冊本の注では、「1184頁」とか「1186頁」と記してミーニュ版『ラテン教父著作集』を頁建ての書物に見誤っているが、この書物は段建てになっていて、同一頁の左右に縦に仕切られた二つの段が並んで立っていて、そのそれぞれに通し番号が打たれている。従って「page（頁）」の略字「p.」をつけた「p.1184」、「p.1186」ではなく、「colonne（段）」の略字「c.」をつけた「c.1184」、「c.1186」とするのが正しい。B1冊本の注を受け継ぎ、「1186」という数字まで示しているラフュマの1951年、1952年、全集の三つの版とアンジューの計四つの版は、いずれも「p.」として誤りまで受け継いでいる。さらに、ラフュマの1951年版にB1冊本の注を橋渡しした Geneviève Lewis による Bonne Compagnie 社刊の『パンセ』（1947年）でも、ラフュマが「p.」として受け継いでいることから当然であるが、「p.」となっている。
- ix) 聖ベルナルドゥス『雅歌についての説教』の仏訳としては、Bibliothèque Nationale の蔵書目録 (*Catalogue général des Imprimés de la Bibliothèque Nationale. Auteurs. t.XI, Paris, Imprimerie Nationale, 1902, cc.535～536*) には、17世紀に次々にそれぞれ各一人の訳者によって刊行された Françoise Oudeau, Rimentel 修道院長、さらには Antoine de S. Gabriel 神父の三者によるものだけが掲載されている。Bibliothèque Nationale de

France の site François Mitterrand においても、1999年8月現在コンピュータ検索画面に現われないため、これらの仏訳書の閲覧はできなかった。また、キリスト教関係書ではバリーの蔵書量の Saulchoir 図書館（パリ13区）でも、これらの訳書は見出せなかった。Cerf 書店の〈Sources Chrétiennes〉叢書の中で刊行され始めた羅仏対訳の『聖ベルナルドゥス全集』でも、『雅歌についての説教』は未刊である。

x) 注viii参照。

xi) B3冊本の注では、『聖なる処女性について』の38とアラビア数字が掲げられていて、これが章を示す数字なのか、段落を示す数字なのか不明であるが、Bibliothèque Augustinienne の *Œuvres de saint Augustin* の第3巻の第2版 (Desclée De Brouwer, 1949) 所収のテキストで確認したところ、このテキストは第38章で第39段落に存在することが判明した (同書188頁)。

xii) トゥルノール2冊本では357番、アンジュー版では596番に相当する。ともに注では典拠を47節としている。なお、トゥルノール2冊本357番断章では、このフランス語による聖書テキストは、断章の冒頭ではなく、後半に位置している。アンジュー版596番断章では、B531, L538同様断章冒頭に示されている。

xiii) Philippe Sellier, *Pascal et saint Augustin*, Albin Michel, 1995所収の Index des citations, allusions et réminiscences augustinienes dans l'œuvre de Pascal にも、*De sancta virginitate* との関連は、1例も挙げられていない。

対 照 表

(左側は L212／右側は L213)

RO	:	467	/	467	IC	:	108	/	108
2C	:	133	/	134	POR	:	XIV 7 (1678年版)	/	...
DES	:	...	/	...	VOR	:	...	/	...
BOU	:	...	/	...	COND	:	...	/	...
Vol	:	...	/	...	BOS	:	II-X 4	/	...
COU	:	...	/	...	FAU	:	II 314	/	...
Hav	:	XVII 4 ⁱ⁾	/	...	LOU	:	310	/	...
ROC	:	256	/	...	MOL	:	II 24	/	...
HAV	:	XVII 7	/		AST	:	505	/	...
MIC	:	831	/	830	Bru	:	528	/	551
BRU	:	528	/	551	GAZ	:	221	/	...
Gir	:	528	/	551	CHE	:	454	/	479
DED	:	541	/	537	STR	:	97	/	262
TOU	:	247	/	247	Tou	:	194	/	195
LAF	:	212	/	213	Laf	:	213	/	213
Che	:	678	/	733	LaF	:	406	/	407
ANZ	:	209	/	210	laf	:	212	/	213
L	:	212	/	213	STE	:	158	/	158
SEL	:	245	/	246	DESC	:	528	/	551
KAP	:	442	/	1391	LEG	:	198	/	199

イ) B1冊本の Table de concordance (「対照表」)、B3冊本の注 (1904年版、1921年版) と Table de concordance (1904年版、1925年版) では XVII 7としているが、まちがいの。なお、たびたび版を重ねた B1冊本では、1960年代ごろからの版の Table de concordance には、新しい重要な「パンセ」の版を掲げるため、アヴェ版は省かれている。